

巨大地震津波、原発事故の国難に今こそダルク精神を

日々、糊口をしのぐ賃仕事に追われて本コラムを掲載できないでいたら、この国が大変な事態に陥った。3月11日午後2時46分、東北地方の太平洋沖で発生した東日本大震災。日本の歴史を塗り替える未曾有の大惨事となった。100年に一度、いや千年に一度とされる凄まじいこの巨大地震は、東北から関東にかけての国家機能や経済、産業、国民生活に大打撃を与えた▼その衝撃の大きさから、発生から1カ月を経た今も被害実態を正確に把握できずにいる。報道によれば、死者・行方不明者は東北の宮城、岩手、福島県を中心に約2万7500人にのぼり、なおも約14万5千人が18都県の約2340カ所で避難所暮らしを強いられている。いったい天の神様はどんなつもりで、僕らにこんな試練を与えたのか。地球のいたずらにしてはその犠牲が計り知れず、試練というにはあまりにも厳しすぎる▼日本が過去に経験したことのないマグニチュード9.0の大地震に加え、度肝を抜く真っ黒な巨大津波、さらに追い打ちをかける福島原発事故の続発…。複合災害の中でもこの原発事故は、完全に原子力の安全神話を根底から覆した。大気中に飛散した放射性物質による被曝の恐怖が拡大し、飲料水や農畜産物まで被害が出ている。まさに天災から人災となり、「原発大震災」の怖さをまざまざと見せつけている▼いきおいメディアの報道がこの原発事故にウエートが置かれるために、どうしても被災地が霞んでしまいがちだ。交通網がずたずたにされ、電気、ガス、水道、医療、情報、住宅、食料、水…、命をつなぐインフラが機能不全に陥り、自治体丸ごと津波にのみこまれたケースもあるのに、その困難の実相が僕らには伝わりにくい。一方で電力会社が計画停電を実施し、被災地から離れた地域では一時期、不安に駆られた人々が買い占めに走り、ガソリン不足が深刻化した▼そのことが被災地をより苦しめていることにさえ気付かず、目先の強迫観念に振り回されている。原発事故の地元被災地からすれば、「なぜ私たちが無慈悲な責め苦を負わなければいけないのか。負うべきは原子力発電の恩恵を最もよく享受してきた首都圏の人々ではないか」というのが本音の

思いだろう。こうした大災害時には、社会の諸問題が露わになると同時に、どう協力し合って問題に対処していかねばならないかを教えられ▼それにしても僕らは、あまりにも生活の恒常性に慣れ過ぎていたようだ。明日も今日と同じように、苦勞せずに手放して平和で便利な暮らしが続くと過信していたきらいがある。しかし、今回の天変地異はどんなに身構え、周到に備えをしても、それをも上回る名状しがたい破壊力が自然にはあることを、未曾有の国難と引き換えに知らしめた。僕らが自然への畏怖や尊厳、感謝の気持ちをどうか置き忘れてきた、そのツケが回って来たのかもしれない▼さて、ここからがダルクの出番だ。周知のように薬物依存からの回復の原点は「無力を認める」ことにある。鍵を握るのが仲間の存在。これこそが当事者主義による自助活動の源泉だ。薬物依存という反自然の究極行為によって人間関係、財産、仕事、信用…何もかも失い、生きることも死ぬこともどうしようもなくなった者たちが、運よくダルクにつながり12のステップ（回復プログラム）に出会う。やがて自分たちの力を超える偉大な存在と自然治癒力に身を委ねるようになる（＝霊的な目覚め）▼こうして薬物に支配された自己中心的な生き方が解体し、人間としての自然感情を取り戻す。果てしない薬物とのパワーゲームから降り、薬物に頼らないシンプルで新しい人生を手にすることで人間的にも成長していく——薬物依存からの回復を目指すこうした仲間たちの姿は、人知を超える天災を経験した日本人に大きなヒントを与えていないだろうか。巨大地震は、改めて「地球が生き物」であることを僕らに教えてくれた。その偉大な力の前では、人間は本当に無力だと悟ったのではないか。だとするなら、僕らは「人間として」の回復のスタートラインに立てたのだと思う▼今こそダルク精神が世の中に役立つ時だ。どん底を経験したアディクトたちは強い。「どうせ俺たちはアディクションで一度は命を失ったようなもの。どっていきているのが奇跡なのだ。この与えられた命を、今度は苦しんでいる仲間のために捧げよう。仲間の命を助けることで自分たちの命も助けられる。今苦しんでいる依存症の仲間、回復できるという熱いメッセージを伝えたい」。抑制の効いたダルクの仲間たちのメッセージは、被災された人たちへの希望のメッセージとしても届くだろう。（市）

※筆者プロフィール＝市毛勝三（いちげ・かつみ）元地方紙記者。現在はフリージャーナリスト。ダルク支援者の一人で、薬物依存症問題などをテーマに掲げる。著書に「漂流の果てに」「我ら回復の途上にて」「少年犯罪論」など。コラムは随時掲載します。